旅風柳多留全集 四

自 四二篇
至 五五篇

岡田

岡田甫校訂

誹風柳多留全集四

自四二篇　至五五篇

三省堂刊

誹風 柳多留全集 四

昭和五十二年五月十五日 初版第一刷印刷
昭和五十二年六月 一 日 初版第一刷発行

校訂者 岡田 甫（おかだ・はじめ）

発行者 株式会社 三省堂 代表者 上野久徳

発行所 株式会社 三省堂
〒一〇一東京都千代田区神田神保町一の一
電話 東京（〇三）二九三—三四四一（代）
振替口座 東京六—五四三〇〇

〈柳多留4・326pp.〉
©1977 by Hajime Okada

誹風柳多留全集四

目次

誹風柳多留

四十二篇……一
四十三篇……三
四十四篇……四三
四十五篇……六七
四十六篇……八九
四十七篇……一一三
四十八篇……一三七

四十九篇……二五九
五十　篇……二八三
五十一篇……二〇七
五十二篇……二三九
五十三篇……二五一
五十四篇……二七一
五十五篇……三〇一

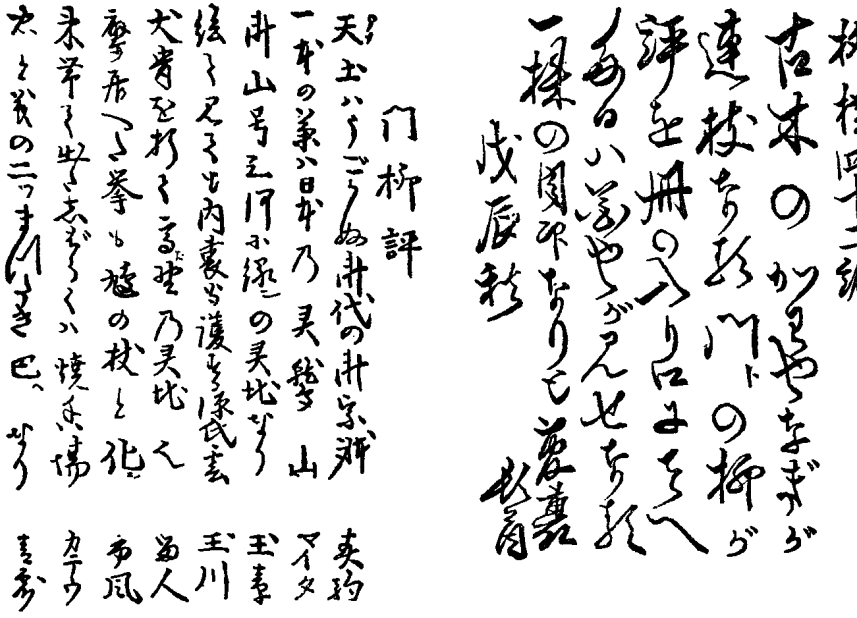
第四巻編集メモ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

柳多留

四十二篇

文化五辰年刊



柳樽四十二編

古木のかわやなぎが
連枝なる門トの柳が
評を冊の入り口にそへ
たるハ花やが見せなる
一株の目印なりと菅裏

戊辰秋　頓首

……【四二・1】

門柳評

天土ハうごかぬ御代の御宗躰　春駒
一本の菊ハ日本の灵鷲山　マイタ
御山号三河に縁ッの灵地なり　玉章（三六・26、孤雲）
繪て見ても内裏守護する源氏雲　玉川
犬骨を折て高ヵ野の灵地也　留人
鷹居へた拳も鳩の杖と化シ　市風
束帯て出たしばらくハ燒香場　カテウ
忠と義の二ッまつたき巴へなり　青露

御の字を下ダへ廻して御名代　糸道
五十帖目にまぼろしの卷を書　矢正
男山舟て見逢のさくや姫　木賀
藤沢の蓮花時かうにかゝわらす　矢正
僧正のかんしやく杣を呼に遣り　如雀
扇おつとり實に扨も芝の鐘　カテウ
法官て踏ム七艸ハ入院也　竹二
一聲ハ時雨の亭にほとゝきす　雨夕
忠度の夜具ハさくらの惣模樣　曉鳥
……【四二・2】

大そうな奉加國主の馬を譽メ　古鳥
佛在世黑くなりての御味方　東夷
粉(彩)色の文て御里ハ安堵なり　矢正
念力の馬島原て草を喰ィ　カテウ
精進の禿一坐もかわゆがり　スヽメ
大の字て碁ばんを蟻の這ふも見ヘ　カテウ
其ほとり石よりこわいぬり枕　矢正
割床の世界ハ知らぬ金屏風　木賀
をしげなく錦を破ル筏さし　紀鳥

鐙へも屆かぬ足て代をふまへ　團素
發心も谷法躰も谷てする　木賀
唐の寺和の堅(賢?)人ハ一旦那　曉鳥
人情の欠ヶをあつめて母ハつぎ　井蛙
災わひて無ひ根の殘る祐天寺　カテウ
放生會(はなし島安七)奉行職にハ千葉之介　竹子(安七・智2)
淺からぬ慈悲草枕せよとよみ　玉川
年寄て衣の色ハわかくなり　志夕
古渡リのあくたい馬鹿と阿房也　三枝
……【四二・3】

星の影消て月見ハ闇になり　カテウ
辜丸かほしいと請ヶぬ御墨付　同
吳服屋と陳(マヽ)屋判取大違ひ　曉鳥
負て勝(利)とハ拝領の碁ばん縞　雨旦(拾九・12)
神の聲色笹葉を顏へ當テ　里梅
かたみ分ヶ貫ふ氣て下女やたら泣　マイタ(一八・30)
王樣の側金銀の御寺なり　夢中
性ハ善也科料を出して垂レ　鳳凰
良藥を耳へつき込國家老　亦樂

借りものを返すと仏様になり　山柳
花てさへ千日草ハ坊主なり　柳鳥
大黒の里て羅子(マヽ)羅を育させ　志丸
錢と小判を石碑の前へほり　眉長
うす墨の玉章里て安堵也　八重喜
上下て持ッハ哀れな螢かご　五友
女房よろこべ半口ハ取て來た　葉石
草餅を產ンて妾ハ胸かやけ　錦鳥
兵粮のからを楠武者にする　スヽメ
……【四二・4】

祐經の虚病御年貢つかへ也　カテウ
かこ付の汐干仕合蛸をとり　山柳
行所ハ湯殿流しハ置土產　木葉
九ッの團子月見に味噌を付　亦樂
年礼ハ預ヶ過して喜(嘉?)左衞門　糸道
窄番の目を貫魚のゑらを抜　錦鳥
細見を詠メて女房此あまだ　團素
魂しいを成仏させる樂屋番　錦鳥
恪ひ國たまるの地名きつい事　曉鳥

人同しからす三歩と二十四文　有幸
下女膳を煮しめ一ッて居へ歩行　カテウ
みな色と金だとゑ(拾)ん(しゃ)ま帳をくり　里松〔拾三・24〕

狐声評

借り物をかへすと仏様になり　山柳(4)
月花の友ハ次第に雪ときへ　マイタ
光明ハ三日の月の跡へさし　井蛙
釈門へ魚鳥の這入ィ、功德　竹子
芝てした扇へ夜の金砂子　草麥
……【四二・5】

酢の味の三色凡夫の口てなし　亦樂
振リかへる時ハ善光まほしかり　巾布
やさァしい鳥哥も詠經もよみ　木賀
御危難ハ鰐の口より龍の口　古鳥
傾せいと化身こくふに花か降リ　里松
雨の脚ふり草臥て時明リ　市風
胸中も水晶らしい善知(マヽ)職　吉門
御茶とふの伽を茶せんて立通し　里靄
命毛の先キも辞世て丁度きれ　古鳥

そうめんハそばを進メて身退キ　紀鳥
名山かふとると月もすこくなり　青我
追善か濟ムと神夏の仲の丁　木賀
燈ろうも戀の部に入別世界　二丁
大イそふな奉加國主の馬を譽メ(2)　古鳥(2)
奉加帳表八句ハ筆になし　志丸
常の水流す紺屋の忌中也　古鳥
仏躰に御後ロくらい像ハなし　矢正
發心も谷法躰も谷てする　木賀(3)

……【四二・6】

おくゐの見る度腹の立ッ女　山石
黄金て高尾交り深からす　亦樂
浮草ハ哥になつても水に入リ　門柳
附ひぼて名跡をつぐいぢらしさ　芋洗
鳥羽殿をかの玉どのかつまむ所　柳雨
年もつもれば雪ほとに白くなり　亦樂
居なんしの味方に雪ハ降出し　藤後
うろこ形ダあれに御舟と指をさし　里梅
三所へ仮リの皇居を二月立テ　團素

六月ハ其日歸りの内裏ひな　糸道〔拾一・16〕
此世の夢も見仕まいと先キの夢　草麥
高山へ登る念仏杖になり　志夕
口よりも齒を參らせる高野山　柳鳥
魚鳥留せすに風雅の手向也　カテウ
祝ィハ千年仏だんの鶴と龜　三枝
如才無ィ娵御經おもよみ習ひ　如石
坊主持あじろハあまり大き過　糸道
塞翁か馬とちへても行次第　亦樂

……【四二・7】

六字より五字と七字か手向也　鬼柳
其後ハぬか味噌和尙斗リ出來　虻内
ちよつかいがうごいて來ると猫て張リ　木賀
精進の禿一チ坐(2)もかわゆがり　スヽメ(2)
十德を仕立茶臼を押に出し　草麥
城をさへいわんや藏においておや　マイタ
大食の國ハ月迄たんと見へ　左逸
いか栗を鼬こつこてつまみ上ケ　錦鳥
一ト拜ミするが珠數屋のしあげ也　竹子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

梅やしき珠數屋ハ無理な詠ゞ樣　志夕
九ッノ團子月見にみそをつけ　亦樂（4）
さん〳〵な月見星まて消たまい　東夷
奢はて今ハ甲良に似せて堀（マヽ）　矢正
人數て買ふ丸綿ハ哀レ也　可笑
朝歸り數居か箱根八里ほと　五友
長ひ夢狸寐入て五十年　古鳥
なき人の爲かやけふの六あみた　市東
焚付て茶釜の脉を引て見る　寛奴

……【四二・8】

太郎衞（兵）あいびやれみいらの迎ひ也　團素
上下て持ッハ哀レなほたるかご　五友（4）
坐頭ノ坊家ごしにさすり草臥る　其笠
ァ、ィとハ扨いけづるい返事也　鬼柳
はたご屋ノ下女三保の谷をおつ放シ　杯舟
やふ醫者ハげんよりへんを見せる也　竹子
どんなものさしがわからぬ釘の寸　カテウ
井戸堀（マヽ）ハ上り家根やハ下りて喰　千靄
行かけの駄賃十月二百かけ　矢正

かうろげ（マヽ）に氣を付られる手ぶつてう　藤後
鳳凰を見て茶ヲあがれ仲の丁　スヽメ
うるさゝに貞女茶せんを剃こかし　三枝
釈尊をよこたてにする春と夏　竹子
床カ下にひよめきの有將碁（茶）ばん　糸道
桐の木を下駄屋に見せる哀也　木葉
魂しいを成仏させる樂屋番　錦鳥（4）
荒海や闇を着て寐る樂屋番　松山
氣か付ィてかぢつた臑をさする也　同

……【四二・9】

おさらばを乳母ハ旦那にして貰ひ　可笑
勘略の障子に種〻の花（な（カ））か咲　藤後（安八・梅3）
手や足を山形にする安ゝ日待　雨夕
しもく橋鐘つき堂の近所也　志水
芋畑親子引とるふてへやつ　集鳥
念仏に力を入レて湯に沈ミ　虻内
そはやの入聟芋つなぎヲ仕出シ　市東
割リ物にわれ物も有るまゝ子算　シメコ
おくの院鈴ふり立て拜む也　寛奴

新造はおへねへお客斗りとり　留人
帆柱のてうちんになる殘念さ　甲長
弁慶か悴けんごに出家する　木賀
張形ておぎなつて置く堅後家　柳雨
赤貝か吹くとたしかに五明樓　里靄

川柳評

影武者に六万べんの御味方　團素
拜領ハ其身に余るきすの魚　虻内
鷹居へた拳も鳩の杖と化し　市風(1)

……【四二・10】

活募(活券)狀かみもかたみも厚ィ緣　古鳥
志しこぶし一ッを精進日　曉鳥
大法事冨士や淺間か罷り出る　如雀
米の餅扨極樂にほと近し　古鳥
發心も谷法躰も谷てする　木賀(3)(6)
手にかけた袈裟を涙て首にかけ(八二)　井蛙(八二・18、迚茂)
念仏を質に置たもよすて人　香貞
御法から花ちる里へ大一坐(二四)　雨旦(二四・36、箕山)
死金をいかして遣ふ野辺送り　志水

燈ろうも戀の部に入別世界　二丁(6)
龍造寺たけに御紋も八百や物　柳雨
やれ鼠〳〵と三千坊さわき　カテウ
死ておしまれたハ小松どの一ト人　玉川
觀音てにじむし言ふを進メ込ミ　東夷
勘當を敎て母が泣はしめ　伊庭
御詠哥て慈悲百番ヲかけ廻リ　都柳
かたみこそ今ハはてなる上着也　葉石
借りものを返すかほんの仏也(仏様になり)(4)　山柳(4)

……【四二・11】

上を見て法圖の有ハ智恩院　箕山
紙花を和尙のちらすねり供養　柳鳥
手向水一荷てたらぬ泉岳寺　マイタ
なき人の爲かや今ハ六(けふの)(8)あみた　市東(8)
上下て持ッハあわれな螢かご　五友(4)(8)
念仏も大きな珠數てらんがしき　青我
天王寺極樂からのまん向ふ　門柳
無常の風にさそわれて壹分消へ　青枝
十八をこへて忽チせん化也　松山

たへま寺仏の手織ものを見せ　玉章
御詠哥の跡へぶら〳〵御膳かご　志夕
弥陀經の通り見て來る善之允　玉章
俗縁て和尚ハ骨をかぢられる　カテウ
念仏をせりうりにして堂を建　桑虫
抹香をひねり姉をもひねってる　志丸
身延山名号ほとな御面ゝ相　矢正
若後家を進メて和尚法をかき　其誠
其後ハぬかみそ和尚斗リ出來　虻内（7）
……【四二・12】（11）

其辺リ石よりこわいぬり枕　矢正（2）
辞世より哀レハ金を貸た人　玉川
はんどくの墓所目白の近所也　三枝
もうせんをぬかせあみ笠かぶらせる　志丸
石切リハ用にも立ぬ字を覺へ　錦鳥
正銅（ヾ）寺咄しハ一ト葉モあわす　山石
臺所てたばこのんでる百旦那　吐聲
出次第に蘓生した人啞をつき　スヽメ
白粉をぬったハ後家のつらよごし　葉石

煩惱をきやうけの爲の苦界也　矢正
過去帳をくるハ御寺の店卸　桑虫
ひよんな事たいそう界の下女を置　門柳
淺漬の押に無縁を納所する　虻内
念仏に力を入レて湯に沈ミ　同（9）
ねはん會ハ仁王に哀レとゞめたり　青枝
放生會鷺より鳩にすればいゝ　松山
哀レさわべろん〳〵と物語リ　矢正
善光に請出されたも流の身　寛奴
……【四二・13】

坊主持あじろハ余り大キ過　糸道（7）
とふとさわ蛙無言の行をする　玉章
地藏尊お好キハ塩やとうがらし　三枝
折〳〵ハ火はたきニなる石地藏　里梅
錢箱のあるハ羅（が）かんのくみ頭（二三）　志丸（二三・13）
法印の器物とハほらの貝　東夷
かん應寺付ケもせないて取たがり　射夕
此世でハたった三筋にまよわされ　雨旦
念仏を百万べんの坐へならへ　木葉

大黒を祭る和尚ハなまぐさし　交鳥
魂しいを成仏させる樂屋番　錦鳥(4)
門跡のひはらに(三三)當るてつほう洲　團素(三三・24)
ふせ鉦や天かいを喰ふとら和尚　千靏
九品仏とんだ茶釜が礼に來る　柳鳥
羅かん寺に百觀音ハ居ゝ　志夕
道具やて作々のつく芋堀(マヽ)出し　市東
五りんハ墓所七りんハ臺所　里靏
青鬼のつらへ忌中の札をさげ　寛奴
……【四二・14】

欠とにハおんあぼきやゞハそごなわす　斗丸
御談義もちよつくと聞ば小うるさし　振袖
客ハ大象おいらんハぼさつ也　三枝
ても坊主じかけなんどハ鼻でよみ　井蛙
お朝しハあそこや爰て穴かしこ　同
六字より五字七ゝ(と七字か)文字の手向(7)也　鬼柳(7)

(以下空白)

亦樂評

本草に葵の能ゥハ書殘し　如雀
本陳(マヽ)の上段に靏羽をやすめ　玉章
車より留主居ノ舌ハよく廻り　矢正
神風ハ凪て不斷の漁父斗ッ　春駒
駿河から御言葉重ッ御順道　鑓持
かたのない智謀熱田のおさいせん　古鳥
大名の中高になる橋のうへ　里梅
近江てハ田地へ琵琶の糸を引ッ　桑虫
……【四二・15】

乳か一ッたらぬと亭主うつたへる　山柳
通辞がないと唐人の無点物　一德
むつの花四季に咲のハ江戸斗ッ　雨旦
雪や氷とへだつれ(たヘ三六)と同し孝　如雀(三八・28、和谷 三六・31、牛賀)
我春を二本ハのこす小松うり　枩山
御殿山から見おろしてくわだてる　門柳
あたりへも知れぬ秋葉御神(の脱?)德　其流
ちへ俤和漢黄色な石と門ッ　集鳥
八橋の樣にならへる琴の會　古鳥(籠三・25、狸声)

みんな馬たといふ所ニへ國家老　青露（安六・智1）（一五・28）
北國の雪に寒ッきを内でうけ　十丈
門叺を取り重藤の眞木を出し　門柳
菜畠を飛草臥てゆめハ覺　松山
來年を苦にする無筆八十七　山柳
ありかたさ島の女房か後家に成リ　川車
加賀紋を着て風流な後家を立テ　市風
ごろふじろ手も相應と保名ほめ（拾）ひ　留人（拾九・10）
極上ハ臍を去る事遠からす　雨旦

……【四二・16】

眞ッ晝間茶にうかされる廿軒　可笑
はたご代直切ッた顔を汁で見せ　松山
帶ときハ男を尻にしきはしめ　桃林
餌さになる雀ハたかをぶつて〆　五友
檢（遣）唐使すでに笏にて払ふ所ニ　伊庭
先のより後のがまゝの紅葉也　振袖
問おとし母のくろうが一ッまし　市東
殿さまハばゝで片肌御日にやけ　竹子
蛇の腹を内義のくゞるいゝ日和　鳳凰

尾の見へる迄ハ九郎介化すなり　五友
ありし昔にかわらぬハさとの咥　竹子
聟土手で三の足迄ふんで見る　雨旦
人主ッを三文持せ（拾）出してかいに遣り　水馬（拾一・14）
立ッ女よこに寐るのが御奉公　山石
さあ飛んだ事だと荊軻秦舞陽　春駒
きついつみ坐頭の内へ入ひたり　金勝
二季のかけ山と榎て取りはぐり　五友
納豆ハさて寒そうなるぼし也　錦鳥

……【四二・17】

味噌になるしたじハまめな小侍　山猿
三兩てもふ武士の部にはいり　志夕（寶十一・梅2）
こたつの手あかるい方を出しておき　八重喜
我尻を置てたらいを小ッかり　後藤（藤後）
景清ハしり餅四郎つんのめり　竹子
親の目ハぬいたがけつの毛ハぬかれ　東猿
大そうなたんすぞうさもなく上リ　木葉
赤みそでなあと鐘馗ハにらみつけ　有幸
隱居のへのこ穴はたへこしをかけ　芋洗

一人ッ者大きな邪厂を一本もち　三朝
弓削の道鏡參内と市の客　有幸〔宋四・8〕

柳雨評

繁昌さ月ハ四分一地をてらし　山柳
御物見にさゝがにの住下やしき　三枝
色にハ出ねと燒桐の御しらべ　春駒
顏へ波打てバらんくいうごき出し　志丸
まくのるす下女もうせんへ足を出し　錦鳥
ふつゝりりんきせまいぞと綿を着セ　雨旦
……【四二・18】

足袋のそこへちま流ニて書て出し　竹子
霜月に來年中の顏を見せ　振袖
千金の場所ハ餅やも竹に虎　柳鳥
星下り納所のつもり細工也　カテウ
談義場て娵の仕打を交易し　瓦合
黑木うり横ぐしいやみからみなし　亦樂
お小町ゑと近鄕へ名をふらせ　山猿
羽おり着た千鳥權兵衞とかまへる　松山
ふきけんで退出すくに飛脚立チ　木賀

紅ィの舌をならへるいゝさじき　其笠
顏見せに顏を見せぬハ馬の足　蔦夫
もうせんて虫を追出すさじき番　若松
五丁のてつほう四季に打御免也　其流
檜扇へ片目出るほと出來かゝり　儘成
申酉の中ヵへ辰巳も引出され　一德
權の字の門に未明の供廻ッ　團素
追かけるやつを西瓜の皮がなげ　十丈
はうき千里ハ竹やぶと知た振　其笠
……【四二・19】

呼子鳥千鳥か鳴て目をさまし　湖來
兄弟か夫婦かげせぬ二王さま　芋洗
角田川是くつきやうのさそふ水　亦樂
ぬれ事の里へみの輪ハ近ィ所ュ　松山
とう〳〵たらりたらされて居續　醉臥
なまぬりなうちおつぱける長曾我ア　亦樂
打取た印へ笹を可児か入れ　五丁
ひとり旅とめて櫻の名か高し　錦鳥
三軒て夏の敵を春ねらい　如石

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com